

1. 実践の背景

修（2015）によれば、日本語専攻教育の新しい国家基準では学生の人文素養の養成を大変重要視するようになり、学生にしっかりとした日本語能力のほかに、日本の歴史、文学及び文化を通曉し、批判的思考力と独創的精神をもち、グローバル化社会に通用する能力の養成が求められるようになるという。この教育方針の転換にしたがい、「言語」＋「内容」のカリキュラム編成が要され、教学時間数が短縮されつつある厳しい状況の中、日本文化類科目を新たに開設する大学が続々出てきた¹。しかし、現状としては、学生の学習モチベーションに偏りが見え、総合日本語、聴解、会話など言語スキルを訓練する授業以外、ほかの授業に対してほとんど関心を示さない。たとえば『日本史』の授業を例にすると、能力試験、就職に直接関連がないと思われ、そして事件や人の名前などをたくさん暗唱させられてきた中学以来の受験勉強のための歴史授業というイメージがまだ残っているようで、日本語専攻だから日本の歴史を勉強すべきだと²思っているにもかかわらずモチベーションが上がらない。

そこで、本実践研究では『日本史』授業を限られた授業時間内で、どのような内容をどのような授業活動で、教学カリキュラムの目標に接近・達成できるかを検証してみたい。

2. 実践の目的

日本語専攻で開講する『日本史』は、日本語教育のカテゴリーの中の歴史教育であることを確認する必要があると考えられる。従って、授業目的も普通の歴史教育とは違い、日本語資料と中国語資料両方を照らし合わせ、自分で考えて分析し、納得できる結論を導いていく力と、客観的に物事を見る目を育てていくことが目標である。とはいいいながらも、歴史の授業に共通している背景知識を要する問題点があり、どうバランスよく能力の養成と背景知識の把握を授業設計に取り込んでいくことはポイントであると考えられる。そこで、一方的な教え込みの授業ではなく、一定の問題提起に対して学生たちそれぞれが自分の意見をもち、討論を通じて各自が自分の歴史認識を発展させていけるような学習者が中心になって主体的に考える日本史の授業にしたい。

したがって、この実践の目的は、この授業の性格と目的に応じて、ポートフォリオ評価を導入し、次の場面での効果を観察していきたい。1) ポートフォリオ評価は総合的な学習の評価方法として、学習者が自分の学習過程を把握し、自分の学習活動をコントロールするためのメタ認知を育てることを意図するものであるため、自主的学習を促すメリットを持っている。それは『総合日本語』の授業で学生の自主的学習の習慣養成や学習モチベーションアップに効果が出ていると張（2015）の実践で分かっている³が、学生の学習モ

¹ 筆者は 2011 年から 2016 年の始めにかけて武漢地区にある 211、985 プロジェクト大学計 7 校の日本語学科カリキュラムを調査し、7 校すべてが従来の日本事情、文学のほかに、続々日本文化、日本史、経済、政治、外交などの授業を開設するようになっている。どのような科目をそれぞれどのような時期に開設してこの国家基準という人文素養を養成し、それらの能力を学生に身につけさせるかはこれから広く研究を展開する必要があると考えられる。

² 実践前アンケートの回答によると、クラス全員がこのように答えている。

³ 同論文では、ポートフォリオを埋めるのに、学生に大量の時間と精力が要されるため、多科目を同時

チベーションに偏りがある「日本史」のような2単位の日本文化類科目に効果があるか。
2) 受験勉強に慣れた学生に考える力を身に付けさせるため、ポートフォリオで自分の学習過程を把握させることで自己の学習スタイルに対して自省をもたらせるか。

3. 実践の概要

3.1 対象と期間

2015年9月から2015年12月の一学期、日本語専攻2年生の19名を対象に実施した。カリキュラムでは授業15回で、最終の16回目は期末試験となっているが、国の休日で2回休みとなり、実際の授業は13回だった。

3.2 教材の選定

従来のやり方に踏襲し、主教材は提示せずに、主要参考文献として浙江大学日本文化研究所編著の『日本歴史』（高等教育出版社、2003年）と王新生著の『日本簡史』（北京大学出版社、2005年）の2部と中央公論の『日本史』シリーズを用いた。

3.3 実践の流れ

1) 実践前——ポートフォリオ内容を設計して、必要書類を作成

書類名	図りたいポイント
グループ活動記録表	学生にそれを記入させることを通して、それぞれの問題意識と課題遂行能力を養成し、自己の学習スタイルに対して自省を促そうとする。中には、解決手段の一つとして、参考文献を書かせる項目があるが、これは学生に結論を出すのは必ず証拠で示すという方法を学ばせるためであり、同時に主参考文献以外の資料を広く読ませる狙いを込めている。また、友たちからのコメント欄は、怠ける際の元気付けとグループで課題解決する協同精神を養おうとした。
自己評価シートと相互評価シート	学生に成績へのこだわりから学習の過程における自身の学習態度、グループ活動での活躍と感想に目を向けさせる内容にした。相互評価シートは自己評価の信憑性の裏づけとなる役割を期待した。
発表評価表	発表グループの成果を他グループの学生に評価し、良いところと不足を指摘してもらうことを通して、自省を促すことと同時に、授業への参加度を上げようとした。毎回、発表評価表を記入してもらい、回収したものを教師が分析し（終わると、学生に返した）、学生にこれから注意すべき点を説明した。

つまり、この設計からここでいうポートフォリオ評価は、グループ活動記録表を通して課外活動での授業課題の進捗過程を把握し、発表評価表、自己・相互評価シートを通して内省を促すという、学習者が自分の学習過程を把握し、自分の学習活動をコントロールする総合的な学習の評価方法として用いたい。

2) 初回の授業

シラバス、進み方、ポートフォリオの役割と評価基準を詳しく説明してグループ分けをした。具体的に、5人グループが3つ、4人グループが1つに分け⁴、グループ活動で出さ

に実施されると、学生の負担となり、かえって逆効果になりかねないとの指摘がある。今回は対象クラスのほかの科目では今学期この評価法を使われる予定がないことを確認したうえで、実践に踏み入った。

⁴ グループ分けの基準は、学生の性格、人間関係、協同学習を展開する便利さなどを考えて学生に自主性を持たせて分けてもらった。各グループが発表、質問を二通り終わったところをもう一回ランダムでグループ分けをした。

れる課題を準備し、次の授業で2グループが発表し、2グループがそれに対していくつか質問を用意して発表後に討論を展開させる。教師は発表内容の補完と授業目的をつなげていけるような質問をして、討論を活発させる。そして、ポートフォリオとそれに入れる書類を配布して日本文明の発生と縄文時代について発表と質問の準備をするようにと次の課題を出した。

3) 授業計画と調整

二回目から第13回まで、授業進行スケジュール表に従って進めていく予定だったが、中間アンケート調査の結果に学生が課外課題の準備に負担が重いから少し軽減したいという要望に応え、実践に少し調整を行った。つまり、室町と安土桃山の両時代の内容を教師主導の形で進み、江戸時代を二回分けて計画通りの学習者主体の形で進めた。休日で2回休んだ結果、予定していた明治時代の内容に入ることはできなかった。

3.4 データの収集

アンケート調査を用いてデータ収集を図った。アンケート調査は実践目標に沿って、学習モチベーションが上昇したか、学習スタイルが変化したかがわかるように設問をした。また、それら観察ポイントの変化をみるため、実践前と後の二回を実施する予定だった。実際では、実践中の負担が重いというインタビュー内容により、実践を半学期に切り替えるべきかどうかの裏付けとして、予定していた実践後アンケートを学期の中間に行った。

そして、ポートフォリオに入れる自己評価シートと相互評価シートにリッカート尺度を用いて、学生がポートフォリオ評価と協同学習に対する考えと自身の学習態度、学習スタイルに対する自省を測った。さらに、二回目、四回目と八回目の授業が終わった後、一人3～5分程度で実践後アンケートにある項目を個別インタビューをして、学生のこの実践方法に対する考え方と学習進行状況を把握し、実践の仕方を調整していく参考にした。

4. 結果と考察

4.1 授業に臨む姿勢に矛盾が見える

実践前のアンケート調査によると、日本の歴史に興味を持っているかどうかの設問に対して、19人中16人が一定興味があると言っている。また、日本語専門の学生が日本の歴史を勉強するべきかについて、全員がすべきだと答え、『日本史』の授業で収穫が得られると高い期待を寄せている。

しかし、どのようにこの授業に取り込んでいくかを授業前、授業中と授業後の学習行為を観察ポイントにして質問したところ、全体的に授業中活動に積極的でない傾向を見せている。授業前、一部を除いて(6人)、大抵の学生(13人)が本かネット資料を読んで予習すると答えている。そして、授業中にどのことに時間を費やしたいかについて、授業内容に集中していくと答えたのは3人しかいなく、ほかの16人が総合日本語や聴解の練習をしながら授業内容に参加すると答えている。しかもクラスメートや先生と討論することや先生の質問に積極的に答えるといった積極的活動より、先生の話をもメモするといった受身的なことに集中している。予習で発見した問題を解決したいと答えた学生が2人だけで、予習はするが、一定の問題意識をもってする学生が少ないと見てよからう。また、授業後に復習する習慣がまったくない学生は3人いて、ほかの16人はクラスメートと授業内容について議論したり、興味のあるところを深く資料を読み込んでいたりすると答えた。

最後に担任教師に対する期待として、一番多くかかれたことはつまらない歴史問題を面白く講義してもらいたいが続いて、参考資料を配って、議論を展開してもらいたい、歴史の脈絡を整理してもらいたいなどがある。

4.2 ポートフォリオ評価活動への参加状況

学期中間にとったアンケートでは、前の三問はグループ活動の状況把握を目的としている。19 人中の 17 人が真面目に参加し、グループ活動の雰囲気に関心をもち、真面目に取り込んだと答えている。つまり、全体的にグループ活動をプラス的に見ていることが分かる。

問 4～6 はポートフォリオについて聞いているが、ポートフォリオに入れている内容は自分の課外勉強を如実に反映しているかに対して、10 人があまり如実に反映していないのに対し、如実に反映しているのは 9 人である。こういった半々と分けた状況について、個別インタビューで原因を尋ねたところ、課外で読んだ資料が多く、それらをすべて記入するのが時間と労力をかけすぎでつい省いたと答えたのが多かった。そして、ポートフォリオに勉強になった内容について、まったくないと答えたのは 1 人で、ほかはみなあると答え、その内容は興味を持っている課題、授業前に用意する質問と授業後の感想に集中している。ポートフォリオをもっと充実させたいかに対して、4 人があまりしたくないが、ほかの 15 人が程度の差はあるが、肯定的姿勢を見せている。

次の問 7 はリッカート尺度を用いてポートフォリオ評価活動に対する学習者の認知状況を調べた。回答から見れば、学生たちは今回の実践活動に比較的協力的だったことが読み取れるが、今後の学習活動により明確な計画を持たせたかは依然と疑問が残されたと言っただろう。したがって、もし教師の要求がなければ、このような学習活動を続けていくかに対して、5 人が比較的続けていきたいのに対し、14 人がしたくないと答えている。さらに、もしこの活動が成績と直接関連しなければ、8 人が続けていきたいのに対し、11 人が否定的となっている。つまり、起因はどうであれ、あまり続けていきたい学生が多数を占めていることが分かる。アンケート最後の自由回答からその原因が分かるが、一番多いのは大量の時間を要することに負担を感じるのと、背景知識が多いため、それらを把握しなければ深い議論はできないというようなデメリットがあると挙げられている。

5. まとめと今後の課題

5.1 メタ認知力の育成

下に挙げたポートフォリオの内容から見ると、効果があったと思われる。

「資料を読んでいるうちに、矛盾点を発見。たとえば、平安時代の女性の地位は高いか低いか、」「一つの時代を理解するために、一つの重要事件を手がかりにすればよいが、一つの思想を探究するのに、その発生、発展と影響からつかめばよい」「自分の言葉で論理的に理解したことを話せるべき、物事の表面にとらわれずに例えば通時的や共時的に対比する手法を使って深く掘り下げていくべきだ」。

5.2 学習スタイルへの反省

まず、学生たちの授業への参加度は前より高くなったとはっきりみられる。そして、課外で読む資料が多く、それらをポートフォリオに埋めるのに大量の時間と労力が要されるのに負担と不満を感じつつも、「時間はたくさんかかったが、知識もたくさん得た」

「欠点はあるけど、全体的にこのやり方はとても良い」と言い、グループ活動を積極的に取り込んだ。そして、「グループ活動を通して、自分の背景知識と学習態度がクラスメートと差があることに気づき、今後もっと勉強すべきだ」「グループ活動で、勉強の効率が高かった」「一人での勉強より、もっとたくさんの内容に触れ、より印象深く勉強することができた」「授業中に出された質問に答えられなかった、グループ活動にもっと積極的に参加すべきだ」「何回の活動を通して、自分がもっと積極的になり、身に着いたことも増えた」「良い発表をするために、用意した内容を十分に理解しなければならない」「自分で考えたり、クラスメートと議論したり、あるいは先生に聞いたりして、いろいろな方法を使って学習していくようになった」などの感想から、学生たちはこの実践活動を通して、自分自身の学習スタイルをある程度自省があったと看取れる。

5.3 今後の課題

しかし、アンケート結果から見ればそれほど大きな効果ではなかったといつてよかろう。これに関していくつか原因が考えられるが、筆者の実践への反省から、実践の焦点を絞りきれず、観察ポイントを論理的に組み合わせれていないことがあげられると思われるし、毎回の授業内容を絞らず修めるポイントをはっきりしなかったこととも関連していると思われる。また、筆者の勉強不足で、データの取り方や取ったデータを分析できていない、または分析しきれていない点が多々残された。これらに関しては次回の授業実践で改善していきたい。

また、この授業実践のサブ目的として、こういった授業活動を取り入れる際に、15回の講義に適するような内容を練ってみた。今回は初めての取り組みのため、あえて大まかなアウトラインだけを提示し、時代ごとの修めるべきポイントを挙げず、学生たちの興味や関心を示すところを観察した。結果として学生のほとんどが主要参考文献の枠に取られてしまい、深く展開することはできなかった。それだけではなく、学習者が自主的に勉強しているうち、膨大な歴史事象について脈絡を見失ってしまったケースも多々あった。したがって、新しい国家基準に沿ったこういった15回の日本史授業に適するような教材開発もこれからの課題として視野に入れるべきであろう。もちろん、中国の大学日本語専攻用に書かれた日本史教材はいくつ出ているが、通史的内容に集中し、授業目標と時間の現状をあまり考えられていないようである。

主要参考文献

- 修剛（2011）『転換期にある中国の大学日本語専門教育に対する考え』（中国語名：転換期中国高校日語專業教育的幾点思考）、『日語学習与研究』
- 修剛（2015）『国家基準の制定と日本語専門の教育改革』（中国語名：国家質量標準的制定与日語專業的教學改革）、全国大学日本語専門教學發展フォーラム
- 陳俊森（2011）『日本語専門の人材育成目標について』（中国名：試論日語專業的人材培養目標）、『日語教育与日語学』
- 張麗梅（2015）『ポートフォリオ評価の日本語専門の授業外学習における作用——三年生『総合日本語』を例とする』（中国語名：档案袋評價在促進日語專業課外學習中的作用——以三年級＜総合日語＞課程为例）、『日語学習与研究』